

研究資料

新出「出羽秋田雄勝郡小野村小町出生旧説略」の翻刻と解題

吉海直人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・特別任用教授

A bibliographical introduction to “DEWA AKITA OGACHIGUN ONOMURA KOMACHI SYUSSEI KYUSETSURYAKU”

YOSHIKAI Naoto

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

【要旨】

秋田県雄勝郡（現湯沢市）は小野小町出生の伝承地、また終焉の伝承地として夙に有名である。そのため錦仁氏『浮遊する小野小町』（笠間書院）・『小町伝説の誕生』（角川選書）をはじめとして、これまでに多くの研究が蓄積されている。本論では「出羽秋田雄勝郡小野村小町出生旧説略」という雄勝町に伝承された雑多な小町伝承の一つを紹介する。

【解題】

はじめに

小町伝説は、北は秋田県から南は熊本県まで日本全国に存在しており、全国小町サミットも開催されている（1）。その中でも秋田県雄勝郡雄勝町は小野小町出生の地として、また終焉の地として特に有名である。そのため錦仁氏『浮遊する小野小町』（笠間書院）・『小町伝説の誕生』（角川選書）をはじめとして、これまでに多くの研究が蓄積されている。

もちろんもともと伝説なので、どんなに研究が蓄積されようとも、一つの答え（正解）に収束されるものではない。むしろ伝説は資料が集成されればされる程、広がりを見せることになる。特に江戸時代以降、小町の人気に目をつけた観光客誘致・地域活性化のために利用されることで、伝説そのものが都合よく変容・増幅させられていく可能性も否めない。そのため雄勝町の小町伝説は、雑多なものを含んでいる。

ということでも小野小町に関する資料は、都合よく合理化されたものが少なくない。しかもそこには巧妙に史実と虚構が織り込まれており、それによって信憑性を醸し出している。それは歴史資料ではなく、あくまで説話伝説資料として扱うべきである。

一

そういった質の問題はあっても、新たな資料発掘は研究にとって必須の作業である。そこでここに架蔵の「諸書祓書」という仮綴の写本（全十三丁）を紹介する次第である。「祓書」は「抜書」のことと思われる。表紙（本文共紙）をめくると、二丁表に「出羽秋田雄勝郡小野村小町出生旧説略」とあって、小町出生及び上京に

至る話が七丁裏まで長々と記されている。

続いて八丁表に、

右旧説略は秋田仙北院内近東氏凡奥坊魯竹俳諧行脚の頭院の中より乞て文静子の写されしを予も又写なり。外に図一紙ありしが童の為に失へりと云。

と奥書めいたものがある。これが本書の成立を知る最大の手掛かりである。というのも、仙北院内の「近東氏凡奥坊魯竹」とある「魯竹」については、錦氏の『小町伝説の誕生』に出ている「近藤魯竹」のことと思われるからである。錦氏によれば、魯竹は斎藤古丁と一緒に「小町塚の文章に副へる記」という俳文を書いているとのことである。おそらく魯竹の書いたものを文静子が写したのである。ただしこの「文静子」が誰のことなのかはわからない。さらに「文静子」の写本を写した「予」こそは、本書の筆者ということになるが、「予」の正体も不明のままである。

ということ、「出羽秋田雄勝郡小野村小町出生旧説略」は、「小町塚の文章に副へる記」から抜粋したものということになりそう。文意が通じにくいところもあるが、幸い錦氏が部分的に引用されているので、その文章と比較したところ、かなり類似していることがわかった。なお錦氏は斎藤古丁の方を主体的に扱っておられるが、本書には古丁が出ておらず、魯竹主体の書き方になっている。要するに本書の資料的価値は、「魯竹」を引用している点に認められる。

この直後に「或人考に云文静」とあって、小町に関する二行分の間書がある（八丁裏は余白）。ここに見える「文静」は、前の「文静子」と同一人物であろう。文静の活動も気になるが、これだけではどうにもならない。

続く九丁表には「新井白蛾祐登宝暦五年夏六月撰牛馬間に」とあって、十丁表まで記事が続いている。十丁裏には「統和歌極秘伝抄に」とあってその記事が掲載されており、十一丁表には「江戸山東京伝近世奇跡考に」以下に「加賀千代尼伝」が十二丁表まで引用されている（十二丁裏は余白）。最後の十三丁は墨付きのない裏表紙となっている。

末尾の「千代尼伝」は直接小町とは関わらないものの、これがあることによって、少なくとも本書が安永四年の千代尼没後に書かれた（写された）ことがわかる。

本書は、錦氏が紹介されている「小町塚の文章に副へる記」の享受資料という位置づけになりそうである。本書の出現によって、小町伝説の研究に新たな光があてられるわけではないが、こういう資料があったことを明らかにすることに多少の意義はあるだろう。

二

さて、表紙に「諸書抜書」とあることを信じれば、全体が先行する文献からの抜粋集成ということになる。そこで引用されている書名に当て比較してみた。

最初の「出羽秋田雄勝郡小野村小町出生旧説略」は、前述のように「小町塚の文章に副へる記」からの「抜書」と見てよからう。内容的には『雄勝郡村記』『詩歌連俳旅客集』にも同様の話が掲載されているようだ。

それに続く「或人考に云文静聞」については、『八雲御抄』からの引用でよさそうである。そこで『八雲御抄』第五名所部を調べてみたところ、「島」に、

やそ（清輔抄云、出羽に有と云々。普通には只八十島也）

（『日本歌学大系別巻三』420頁）

とあることを確認した。ただしここに觸體のことは出ていない。

それ以下に「新井白蛾祐登宝暦五年夏六月撰牛馬間に」とあるのは、「牛馬間」（宝暦六年版）巻一「小野小町」と内容がほぼ一致しており、版本の写しと見て間違いないさそうである。そこに引用されている鴨長明の『無名抄』を調べてみたところ、「小野」とはいはじの事」項に八十島の觸體説話が引用されていた。

次に「統和歌極秘伝抄」（元禄十五年版）を見ると、「小野小町が事」としてほぼ同じ内容が記されており、やはり版本の写しで間違いないことを確認した。

末尾の「近世奇跡考」（文化刊行刊）の版本を確認したところ、やはり巻五「十一加賀千代尼伝」とほぼ一致していた。ただし末尾の次の一文が本書では漏れている。

千代秀吟おほし。柿のはつちぎりの句。おきて見つ寝て見つの句。百なりの句（2）のたぐひ人口にあれば、ここにもらしつ。

ということで、本書は書名の通り諸書からの抜書であることを確認した。

三

本書の記述内容で面白いのは、文禄年中に勃発した最上義光と小野寺義道の合戦によって、貴重な小町関係の資料（良実の旧記・小町の文）が焼亡したとしている点である。これについては錦氏も言及されているように、それ以前にいかにも資料があったように偽装できるし、焼亡以後は里人の語りが唯一の伝承とならざるをえないことを狙った文飾であろう。

また都に上った小町は、母方の身分が卑しいので、自らの生地を言わなかったとあり、そのために小町についての謎が生じているとしている。これももつともらし

い理屈である。その場合、小野良実の娘であることはどう考えるのだろうか。

もう一つは「牛馬間」の説である。ここで小町は固有名詞ではなく、後宮の后町に集められた六十余人の采女すべてに与えられた共通の名としている。そのために全国に小町伝説が散らばっているわけだが、それを無理に一人の女性の事績としたことで混乱が生じたのだと説いている。集団で同じ名を名乗るというのも、説話に多いパターンであろう。但し、肝心の出羽から采女は出されていないかつたとのことである（『類聚三代抄』）。

最後に、小町の父とされている小野良実について考えてみたい（3）。というのも良実は架空の人物とされているからである。確かに九〇〇年代に小野美材という人物の名があがっているが、それでは年齢が合わない。

おそらく出羽に小野一族が何人も赴任していること、それもあって出羽を小野寺氏が所領としていたこと、其の縁で小野村があつたことなどが小町説話を引き寄せたであろう。末尾ながら、本稿を書くにあたって、錦氏の研究を参考にさせていただいたことを申し添えておく。

〔注〕

(1) 私も大宮町主催第四回小野小町サミット（於丹後大宮町アグリセンター）平成13年10月14日で「百人一首と小町」という講演をさせていただいた。

(2) ここに一部引用されている千代尼の俳句は「浜かるか知らねど柿の初ちぎり」
「起きて見つ寝て見つ蚊帳の広さかな」「百なりやつる一筋の心より」の三句であろう。

(3) 小野良実については、増田繁夫氏の小野小町人物評伝（『百人一首100人の歌人』新人物往来社）にうまくまとめられている。それによれば良実説は『尊卑分脈』や謡曲『卒塔婆小町』に見られるとのことである。また歴史上の人物として延喜十四年の『外記補任』に小野美実という名が見えているが、年代的に小町の父は無理とのことである。また「讃岐国入野郡戸籍」に「春町・弟子町・小町女・町子・今町」などの女性名が見えることも指摘しておられる。

【翻刻】

諸書祓書（二丁表）（二丁裏は白紙）

出羽秋田雄勝郡小野村小町出生旧説略

小野小町は大同四年に生れ、昌泰三年九十三才にて死といへり。小野村に云伝へしは、小野郡司良実卿此村に居住し給ひし時、田植の早乙女の美なるを見て、いまだ人に嫁せざるを以妾とす。此娘は水口（小野内也）と云所の町田長左衛門と云者の娘大町子と云りとぞ。是小町が母なりと云。

小町が母は産屋の中に死して祖父母（町田氏也）養育して小町子（1）と名づく。時うつり町田氏夫婦病す（此時飢饉にして疫病流行と云）此故に小町子を呼て云て曰、汝は郡司良（二丁裏）実卿の娘也。良実卿帰都の折は母の胎内に在て、共にのぼる事を得ず。汝をうみて母も又死せり。良実卿も又途中にて死給へりとも聞り我々存生のうちに成人せば、連れ登るべしと思ひしが、もはや存生叶難し。我々死後に如何にもして都に登り、父良実卿を尋ぬべし。又途中にて死し給ふとも、必ゆかりの人あるべしと、良実卿の大町子に残されし守袋を渡して、終に其病に祖父母ともに死せり。小町子悲しむにたへずといへども、遺言にしたがひ都へ登らん事をおもふ。（二丁裏）此時芍薬の実をとりに宮内（小野内也）走明神の社内に（良実卿信仰の明神）植て都へ滞なく登らん事を祈る。村の者も甚是を憐て、歩に登るの序ありて連れ登ると云り（2）。小町子十三才の時也と云。

芍薬今猶有り。花は薄紅ひ一重也。咲時は赤し（3）。散る時は白し。大輪也。花に影無し。花葉共に取る事を禁ず。若取事有は必ず雨降。此芍薬自昔小野村に田植に非ざれば不開。開時は果而早開有。此故に里人田植花と云。

和歌の宮は良実建立住吉大社也。後人和歌宮と云（三丁表）は、里人此宮に良実の旧記小町の都より送りし文やうの物一つの筈にて此宮に納めおきしが文禄年中兵火のために焼亡す。

文禄年中最上義光等弟義安をして小野寺義道の家臣仙北の教城責しむ。此時の事也とぞ。

此時熊野社和歌宮および林家若干焼失す。爰に於て小野の旧事を今将惜むにたえたり。小野村（駒が嶽の庄と云）村七つ 境 古戸 宮内（昔走明神大社也。此故に名とす。実植の芍薬も此社の内とぞ。今小社なり） 寺町 飯塚 十日町 水口（是小町子が生れし所也） 以上七ヶ村を合て小野村と云。（三丁裏）

小町庵は小町が母の遺骨を葬る地也。里人小町の徳を慕ひ其母の跡をあわれみ

て草庵を結びと。是小町が都より云送りしによつてなりとぞ。今此庵跡のみありて庵はなし。野中山向野寺(宗洞)は其庵地也と云。良実不興を蒙り此村に下り給へりと云(和歌宮焼亡して年月たしかならず。猶おしむべし)。其証は古書にも良実出羽の国にて死すとありとぞ。然を小野村より帰都の途中にて死せしという拠なきにあらず。

小町都に登りて母の姓の拙く賤を恥て生地を不言(四丁表)とぞ。此故に世々の先哲も小町の説紛々として真偽をわかず。然ば爰に出生の地と云ひ実植の芍薬あり。良実の植られし由緒の松は千歳の佛に残り、二つ森に八十島と云(4)は業平の奥行に詠し時名附しとかや。其外遺蹤すくなからず。此故に増補行程記(5)にも小町出生の地と記せり。昔(元禄年中のよし)上方より雲水の僧、吉左衛門(6)と云者の家に一宿して小町の旧説の事におよぶ。此僧難じて曰、小町は官名にして小野をもて出生の地とは疑らくは後人の好事ならんかと。吉左衛門答曰、小町の(四丁裏)母は水口町田長左衛門と云者の娘也。其妹もあり。雅楽助(7)と云者に嫁したり。其子孫今修験となり今当村の祈願所とす。猶小町が母の家跡今少しく残れり。小町の母を大町子と云るより其娘を小町子と号く。都へ登りて後官名の小町にあらず。美婦無双の歌人と也。其名小町たるを以其官に任せられしかしらず。何ぞ好事の沙汰といはん。然れども夫等の旧説は文禄年中兵火の為に焼亡せり。只里語に残れり。元より小野村は小町出生の地ならずとも恥とするにあらず。又出生の地にして何の益(五丁表)かあらん。然らば後言を巧にしての好事ならんや。予上京せし折小町の旧跡尋聞り。又とるべきの証なし。吾子は風雅の人にあらずと大きに恥しめしかば、一言もなかりしとぞ。

小町老て小野村に下りて果しとぞ。槌成証なしといえども別堂林と云山中に一の洞あり(洞の中五間四方程あり。岩をうがち棚の如くしつらい又戸をもうけし跡あり。不思議の洞なり)此洞中に老嫗住めり。いつより幾年住しと云をしらず。或時我形を彫み立置て後老嫗なし。其林下に真言の寺あり。住寺我寺移せり。時々不思議の事多く住僧(五丁裏)気の毒がりて桑崎村洞善寺は小野村にゆかりあるより其寺に遺し置ぬ。或夜此像盗みて(8)仙北郡金沢村の山伏のもとに売ぬ。其寺に三途川の姫と号く。其形ち片膝を立片手に短冊を持たる形也。彼姥の自作也。三途川の姥とは非なり。其像に書付あるといえども是は後人の作也。

走明神

昔大社也。実植の芍薬も此社内也。是良実帰洛を祈し明神なり。(六丁表)

桐田

良実居住の跡あり。昔大木の桐有。依而名とす。今も桐あり。小木也。熊野社

古社也。和歌の宮は別に社地ありしが兵火の後此社の内に小社を立つと云。別堂林

洞に老女の住める跡あり。必往て見るべきなり。小野村の西川向の山中にあり。向野寺(六丁裏)

禅宗小町が母を葬る小町庵の跡也と云。

水口

小町出生の所也と云。

芍薬

小町十三才の時植ると云。今猶あり。すでに千年に及ぶと云へども増減なし。

由緒松

良実の植たる松と云。(七丁表)

小野村里語小町生死考

三十二代敏達天皇―春日皇子―妹子皇(一)永見(一)峯守―篁―良実(実は坂上右衛門佐当道が子出羽国にて死す)―小町(大銅四丑年出羽国小野村水口の民家に生る。生れて母を失ひ生れざるさきに父を失ひて十三歳にて都に登る)

平城 嵯峨 淳和(天長) 仁明(承和嘉祥) 文徳(仁寿天安斎衡) 清和

(貞観) 陽成(元慶) 光孝(仁和) 宇多(寛平) 醍醐(昌泰)

右皇祖十世年曆九十有三歳に而小野別堂林洞中に跡を隠す所謂仙女す(七丁裏)

右旧説略は秋田仙北院内近東氏凡奥房魯竹俳諧行脚の頭院の中より乞て文静子の写されしを予も又写なり。外に図一紙ありしが童の為に失へりと云

或人考に云(文静聞)

業平の小町が觸體を見しは(9)出羽の八十島なりと八雲御抄に清輔の云出羽にあり。(八丁表) (八丁裏白紙)

新井白蛾祐登宝曆五年夏六月撰牛馬間に

或人の曰、小野小町が事つれづれ草其外説まちなれどもさだかならず。長明が無明抄など考合すれば小町が盛は業平より以前のやうに思ふ如何。答曰、古代には一國より一人宛采女を内裏へ献ぜし事也。既に仁明帝の前後には小町と召れたるも

の六十余人有しとなり。此采女を后町のうちにおらしめ給ふ故にみなみな小町と呼れたるなり。其人々の「(九丁表) 宮仕へを止て(10) 古郷に帰り身まかりたる墓をおほかた小町塚と呼しとなん。扱こそ国々に小町塚と云もの多し。美濃尾張の間にさへ二三ヶ所あり。しかるをなべての小町を一人のやうに思ふより紛たる説多し。たとへば実方朝臣陸奥へ下向の時髑髏の目穴より薄の生出て秋風の吹につけてもあなめあなめの歌の小町は小野正証が娘の小野小町也。文屋の康秀が三河の掾と成て下りし時、身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばとよみしは高雄国分が娘の「(九丁裏) 小町也。おもひつつぬればや人のみたら(えつら) んの歌又業平の舞の袖(11) などいひしは出羽の郡司小野良実が娘の小町也。高野大師の逢給ふ壮なる時橋慢最甚し。衰る日愁歎猶深(12)」と答しは常陸国玉造義景が娘の小町也。かく一人ならず時代其外異なる事あるのみ。中にも良実が娘の小町が美人にて和歌もすぐれたれば獨名高くすべて一人のやうに伝へ来るのみ」(十丁表)

続和歌極秘伝抄に

小野小町が事出羽の郡司小野良実が領地の民のむすめなり。御門より美女を召けるに女むすめすぐれたる美人なりし故則良実を親として十三才の時内裏へまいりし也。十五にして后にたつべかりしを打続なげきのみせしかば終にむなしくて老ける也。今に小町が出し郡よりは美女老人づつ出ると申伝ふ。大同四年に生れて昌泰三年に死す。九十二才と云々」(十丁裏)

江戸山東京伝作近世奇跡考に加賀千代尼伝

千代は加賀松任駅(金沢より洛の方へ四里去) 福増屋古兵衛と云者の女也。いとくなき時より風雅のこゝろざしあつく、一時俳諧あはれの句をせしを、父母聞てさばかりのこゝろざしあらばとて行脚の俳人(一説云支考門人盧元房) を家にとどめて学せけり。扱十八才の頃金沢の福岡某が家に嫁す。其後夫身まかりければ、松任に帰、父の家においてますます俳諧をたのしみ、廿三才の時京にのぼり、勢州にいたりて森林舎乙由の門「(十一丁表) 人となれり。廿七才の時再上京す。其後頭をそりて素園と云。容貌美にして言語少く常に閑寂を好む。画も又よくす。松任は京へ往來の要路なれば日ごとに諸国の旅客に交り、もとむるに応じて書画をあたへけるゆへに、其名海内にきこえけるとなむ。

安永四年九月八日寂す。享年七十四歳。辞世

月も見て我は此よをかしくな

金沢専光寺(一向宗) に葬る。又松任駅聖興寺に碑を立て辞世の句を刻む(以上)。

千代尼の一族松任駅村井「(十二丁裏) 屋小十郎ものがたりき。

一説に千代北越の呉俊明に画を学ぶと云。予此ころ俊明の孫なる淡斎主人にまみへてとひしに其説にたがはずといひき。

又一書に

ほととぎすほととぎすとして明にけり(13) と云を千代が初学の句なりと云は誤ならん。

ほととぎすほととぎすとして寝入けりと云伊勢の涼免(菟) が名句あり。(十二丁表) (十二丁裏白紙) (十三丁表裏白紙)

〔注〕

(1) 母を「大町子」とするのは、年少者を意味する「小町」からの類推であろう。
(2) この話は「雄勝郡村記(文化年間成)」に酷似している。ただし「雄勝郡村記」では小町の父の名前は町田治郎左衛門となっており、本書の長左衛門とは相違している。

(3) 芍薬の色は「赤」とあるが、菅江真澄の『粉本稿』にも紅色に描かれている。また「若取事有ば必ず雨降る」という話は「諸国里談」などにも見られる。
(4) 「二つ森に八十島」に業平が登場しているのは、『江家次第』を引くからである。その業平が実方となったり、二つ森が深草の少将と小町の塚になったりしているが、本書にそういった説話の広がり認められない。

(5) この「増補行程記」は清水秋全の『増補行程記』(寛延四年刊) のことか、あるいは菊岡仙涼の『大増補日本道中行程記』(延享五年刊) のことか。

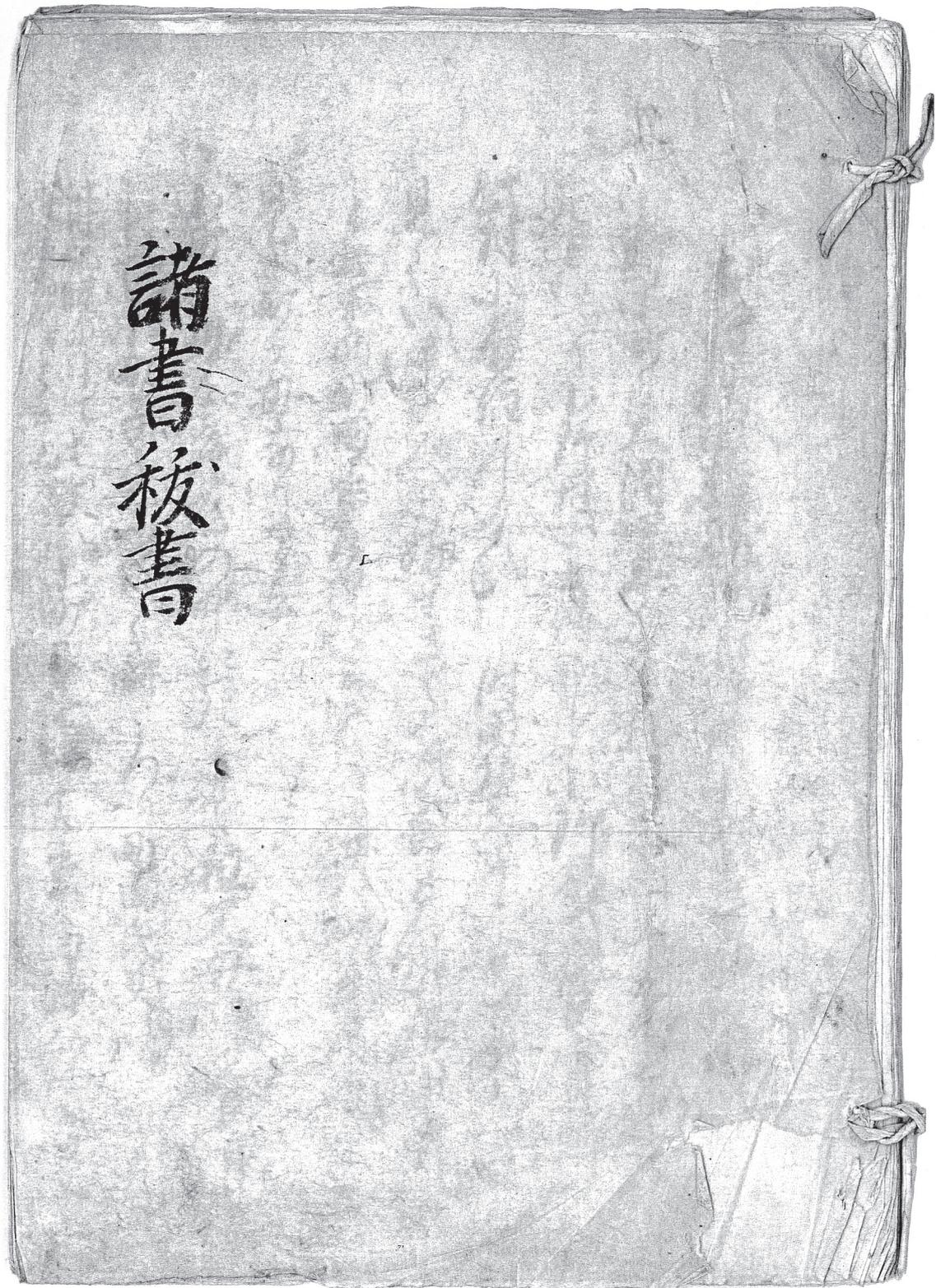
(6) この「吉左衛門」についても、『小町伝説の誕生』に、文政二年(一八一九)に古丁が書いた「小野小町家系」(『雄勝町史』)に「小野村の吉左衛門といふもの、戸辺一閑(戸辺一黙齋のこと) が門人にして、古事古跡なども聞くことなく知りし者也。」と記されている。

(7) 小町の妹が雅楽助に嫁いだことについては、錦氏が詳しく分析しておられる。この雅楽助が「菅宇多之助」や「高橋武太之助」に継承されているというのも興味深い。

(8) 「此像盗みて」云々は真澄の『月の出羽路』にも記されている。

(9) 業平が小町の髑髏と対面する話は、『江家次第』『古事談』に出ている。その他、小町の髑髏説話は『玉造小町子壮衰書』『和歌童蒙抄』『袋草紙』『袖中抄』『無名抄』などに見られる。

- (10) 「后町」については、吉海直人『源氏物語』「二の町」攷 解釈40―10・平成6年10月参照。
- (11) 「業平の舞の袖」については謡曲『鸚鵡小町』の一説か。
- (12) 「壮なる時憍慢最甚し。衰る日愁歎猶深」は『玉造小町子壮衰書』からの引用。『徒然草』には「高野大師」を『玉造小町子壮衰記』の作者にあてている。
- (13) 「ほととぎす」の作者は、岩田涼菟りょうとではなく岸本調和とされている。



[図版1] 新出写本の表紙 (1才)

出羽秋田雄勝郡小野村小町出生旧説略

小野小町は大同四年小生れ昌泰三年卒と云
死といふ小野村小町一一小野那司良實卿

付村小町一一付村那司良實卿の早乙女の弟なりと

見ゆいす人小娘せさるをい奇とけ娘水口水口

と云本の町田長なると云老の娘小町子と云いと云

是小町子母ありと云

小町子母を産屋の中中に死して祀父母留養育

して小町子と名づく時より町田氏支婦病に

付時飢饉飢饉にして十故小町子と呼んで云て曰汝那司良
夜宿流り夜宿流りと云

〔図版2〕新出写本の冒頭部分（2才）

右四親略ハ秋田仙北院内近東氏凡真着
 尊行他諸行拂の頸院の中より乞く
 又釋子の寫されしと申も又云あり
 外小岡一帯のうらまのたふまふ
 と云
 中人考ふ云 又釋子
 業平の小町う體釋と見えし出羽の八十路
 ありと八雲沖舟小法師の云むありあり

[図版3] 新出写本の奥書部分 (8才)

屋中命よめりて
 一夜小糸代心靴の善俊明小画と学小糸
 平は後俊明の孫ある清斎と云小糸人
 てと云小糸後ふたりと云といひ
 又一書小
 作と云と云明ありと云と
 小糸の初学の句ありと云は清ありと
 作と云と云と云入ありと云作初
 涼免り各句あり

[図版 4] 新出写本の末尾部分 (12才)